

怨念と屈辱の生活の総体を熱いダイナマイトにかえて敵のドニツパにぶちまける。

鹿ヶ崎文郎

看護に。

「現実問題として患者達は非常に苦しんでいるのです。医者の立場としては患者が何日も眠らず食事を拒絶し、実際に苦痛を訴え、死に至るのを黙ってみている訳にはなりません。」

なるほど。

帝国主義市民社会における「秩序」と「平和」は下層労働者に大量の薬を与える。

この患者をアル中・流・乱暴と名づけよう。彼は、帝国主義市民「秩序」と「平和」の下では常に強姦を麻痺させなければ生体活動を維持できず、資本の要請に従って全国の寄せ

★これは、船本洲治同志（コーちゃん）が、さきおとし（一九七二年）の一〇月に書いたものです。署名は「鹿ヶ崎次郎」で、笠ヶ崎医療を考える会発行のいのちのちろみ二号（一九七二・一一・一〇）に掲載されました。ここに全文転載して、船本同志と彼にちなむ殺られつづけている仲間たちとに捧げます。

——編集人

I

精神病院で医者は患者に大量の薬を与える。医者は言う。患者に対してではなく、保護

係・全国の飯場・全国の工場を流れ歩き、不良労働者とも過激労働者ともいわれる暴者である。

II

一九七二年一月某日、飯場に入ったタチが釣り足場からレコして死んだ。仕事は言無の正月をめぐる厳しい冬を生きのび、ようやく仕事もチラホラと出はじめ、これでツレにお返しができる、飯場に入って間もなくだった。

タチは一冬ツレに面倒を見て貰って、飯も食わず、悪い酒を飲みとおしだった。解剖の時、胃袋は異臭を放っていたそうである。

タチは死ぬ間際、自分が沖縄出身であると初めて名をおかした。

タチは「悪い目」を感じていた。そしてまた「罪の意識」を持っていた。

タチの死は、タチの死ぬ間際の意識からみて、故郷のタチに連なる人々へのしよく罪

にあつたろう。

なるほど。帝国主義は沖縄を肉体だけではなく、頭脳さえもこういう風に支配するのかわく。

III

私はと言えば、まて、長い間「悪い目」を持って生きていく。おまけに「罪の意識」をしよいこんで。

やりきれんのお。

ところで、私は何について「悪い目」を持っているのだろうか？

いつもそれは漠然として不確定なのだが、恐らくそれは、私が人々の期待を裏切つて生きてきたからだろう。母親に始まり、出会ってきた人々の大半を。

市民社会の価値基準から、私は過五種々なレッテルを貼られた。

そしてそのレッテルどおりに、私に連なる人々の大半が、私によって「不幸」にさせられたという意識を持っている。

それは耐えられないことだ。

しかし今、私は、「負い目」だの「罪の意識」だのという意識が、制度によって与えられたものであることを知っている。制度は肉体だけではなく、心をも支配するということ、「罪の意識」を持つことによつて制度は正当化され、支配は完成されることを知っている。そのため、人々を私を恨めは、それだけ私は制度を憎むようになった。私の頭脳は急進化し、容理はふくれあがり、悍然しこうになる。

帝国主義市民「秩序」の「平和」に耐え切れず飲みまぐつた平況から一歩進んで、むしろ頭脳の爆発を抑制するために飲むという無限の喪失のコースを、敷かれたレールを歩いていく。

なるほど。

永山則夫が「改訂」しし時には出るに

れぬ死刑囚というやつだ。彼は目覚めに無数のアル中・癩・乱暴たちが「負い目」や「罪の意識」を断ち切つて斗いはじめるとき、武器としての肉体すらも収奪しているのか？

Ⅳ

状況は少しも急進化せず、強だけが急進化するとき、それが状況の総体を急進化する武器の政治を構築する方向へではなく、行動に転化されるや、みじめな結末が行手に待つ。

私は、無数のがねがねが一人一人ひきはがされて「犯罪」のレッテルを貼られ刑務所か精神病院のどちらかに隔離されるのをみている。

私は、夕子が反抗の表現すらもせず現場で死んだこと、それは明らかに冬、仕事のない状況が夕子の肉体をボロボロにしたこと、凍死と何ら変わらない死であると考えてる。

Ⅴ

がねがねの現在に暗黒であり、がねがねの未来もまた暗黒である。

Ⅵ

私は、私の基本的感情が、おとなしく野に死にしたいこと、そしてそれがタイトルの妄想で今にもおしつゝそれぞうであることを告白する。

それは、がねがねの現状打破への願望が、強烈であり、ラディカルであり、どこにも私の妄想を満たしてくるような急進化された状況がないことを意味する。

私は過去、何度もチンケな「犯罪」でパワラれた。

私は、がねがねに敵対する制度が、私の妄想に關してすらもイチャモンをつけて来るのを知覚する。

私は、対極にひき裂かれた頭をかかえて、いつもいらいらしてを覚える。私は、もう一つの現実思考を忘れ、妄想のみを思いえがき救われる人々を天獄の囚人と呼ぶ。私は彼を日和見主義者と規定する。そして更に、妄想を思いえがくこともなく、ただ、現実思考の

私は見ている。がねがねの死を知っている。暴動の最中で亡き殺されるのはまだいい。ドアのベッドで、公園のベンチで、がねがねの死体はまるでゴミを処理するような調子で片付けられるのを知っている。がねがねの死は、それでも丁寧に埋葬される。だが、がねがねの死体に如何ほどの意味がある。

私は知覚する。

がねがねの肉体が次第にボロボロになって

ゆくのを覚える。

がねがねは一生狂にわたるアシュラとして、肉体を、感性を、奪いつくされ、やがて廃人となるのだ。

現在、若い諸君はいずれ年をいてゆけはわかるだろう。がねがねの客観的未來が野に死に以外ないことだ。

がねがねはやがて武器としての肉体すらも収奪されるのだ。

名の下に制度と交渉する人々のことを社民と呼ぶ。

私は不条理を運ぶ。

天賦の四人たちは、現実から裁かれるであろう。

社民たちは革命から責められるであろう。

私は、庶人の道を歩みながら、ひねねれと

編集後記

だと思っているの——。

◆しかし、「肉体」は、どうや

ってみても我々のもとには帰ってこない。その悲しさはどうしようもなく、そのくやしさはまた、どうしようもない。◆彼の死を「犬死」と評論し踏みつける者に対しては、彼と共に、また野に死んだ仲間と共に、

◆今月号の特集は「追悼・熊本自治会——こうちゃんの自決とおいらの野に死にたてである。このような特集をやることにについては、編集委員のなかに反対意見もあった。◆しかし、私は、どうしてもやりたかったのだ。彼の自決以来とりつかれたように、ただそうするのが私の「義」

一緒に、野に死ぬ前に斗い続けるだろう。そして野に死ぬかも知れない前に、脳漿が爆発するかも知れない。どちらにしても私は、既に罰せられた存在である。

★注：フブきは書かれなかった。

労務者渡世八月号

(通巻第九号)

一九七五年八月八日(毎月八日)発行

《編集発行》労務者渡世編集委員会

(代表・中原哲也)

《連絡先》(郵便番号五五七一九一)

西成郵便局私書箱第三一五

郵便振替口座・大阪二七八三五

《本誌取扱所一覧》(順不同、1975・7・31現在)

- | | |
|-------|--------------------------------|
| 平沢 | カスミ町交差点北、古本屋さんデス |
| ④ | 銀座通り、新直化手荷物預りの店デス |
| かとう | ジョンベングード近く、新直化通判様の店デス |
| 千石書房 | 新南橋「ニュー大阪」東方の本屋さんデス |
| 高梨書店 | (もと全集堂書店) 萩之茶屋商店街とまんなかの古本屋さんデス |
| いこい | けいさつうの公園の北、食堂デス |
| 釜ヶ崎生協 | 南町西となり、軍手と牛乳ラーメンの店デス |